【初期ヤマト王権の成立プロセスに関して】　　by　N. Miyamoto

Ver.up 1.0 (第 1 回改訂/2023.7.23)

1.　はじめに

日本の古代史において様々の議論があるのは周知の通りであるが、特に邪馬台国論争はエンドレスの趣きがある。その論争は、候補地のいずれかで親魏倭王印が出土するまで収まらず、仮に出土したとしてもその状況よっては、議論は収束することなく過熱するのかもしれない。邪馬台国の存在は、記紀(古事記＆日本書紀)に記された神武東征の存否やその後の初期ヤマト王権の成立と直に係ってくる。これらの連鎖を放置せずに、今ある程度の見通しを与えることは、邪馬台国論争にもまして重要なテーマではないかと思う。ここでは、初期ヤマト王権の成立に向かう流れを大きな視点から捉え、下記の前提をおいて**仮説的な年表**を提案したい。

① 基本的に文献史料類の記述に準じるが、考古学などの情報も考慮する。
② 邪馬台国論争については、一応、畿内説を留保し北部九州説を採用する。
③ 神武東征およびこれに先行する饒速日の東遷を一定の史実として認める。
④ 記紀の出雲神話などの中にも、ある程度の史実が含まれることを認める。

まず①について。纒向遺跡の発掘成果がニュースになったとき、素人目ながら、崇神天皇や景行天皇の宮跡や墳墓が存在し、唐古・鍵に連なって繁栄が想像される土地柄であるところから、さもありなむと思っていたが、あっという間に、それが邪馬台国の確定にまで昇格したのには驚かされた。津田史学に準じて、考古学の成果だけで歴史を編めば、そういう結果になるのかも知れないが、記紀に見られる初期ヤマト王権の痕跡の可能性も保留されるべきではないかと思う。ただ文献史料に含まれる虚構性や考古学で予想される不全性を考えれば、その突き合せは決して容易ではない。ここではシュリーマン的な発想から中国史書や記紀などの史料類(以下**伝承資料**)を枠組みとして用い、その補完として考古学の成果(以下**考古資料**)を考慮したい。

次に②について。邪馬台国の問題をどう扱うかで議論の展開は大きく変わる。北九州説と畿内説の論争は纒向遺跡の効果もあって、現状、後者に分があるようでみえるが、

邪馬台国に至る里程と方位、卑弥呼の墳墓の比定、中国側からの倭国の定義、狗奴国との関係など

について適切な説明が不足すると思う。弥生社会のクニの規模は比較的小さいと思われるので、倭人伝の冒頭にいう倭の三十国については生産性の高い北部九州とその周辺だけでも十分クリアできるはずである。ここでは北九州説に優位性があると判断する。

さらに③について。遺跡発掘が進むにつれて予想外の弥生社会の拡がりに瞠目することが多く、たとえば、考古学分野では、注目の 2, 3 世紀を逆転の時代と捉え近畿-瀬戸内勢力による北部九州支配を説くこともある。しかし遺憾ながら伝承資料にそれを連想させるものは見当たらない。クニグニの間の緊張と対立によって社会的に流動化した往時の九州島には、東に向かって押出す力が充満していたように思う。伝承資料にいう饒速日(物部)の東遷も磐余彦(神武)の東征も、この東向きの押出す力に由来すると思う。

最後に④について。記紀における出雲-伯耆-因幡の扱いは特別である。そこは天照の弟・素戔嗚の亡命の地であり、幸運で偉大な王である大国主の故地でもある。記紀の記述や荒神谷遺跡/加茂岩倉/西谷墳墓群/妻木晩田遺跡などから予想されるのは、弥生中期以降の拠点集落の競合の中から強力な王権が生まれ、これが中国東部から近畿/北陸にかけて分散するクニグニを緩い形で結合して葦原中国を形作ったものの、やがて西からの軍事的圧力に屈し、結果的にヤマト王権に吸収されていったという時代の経過である。

2．推定年表の提案

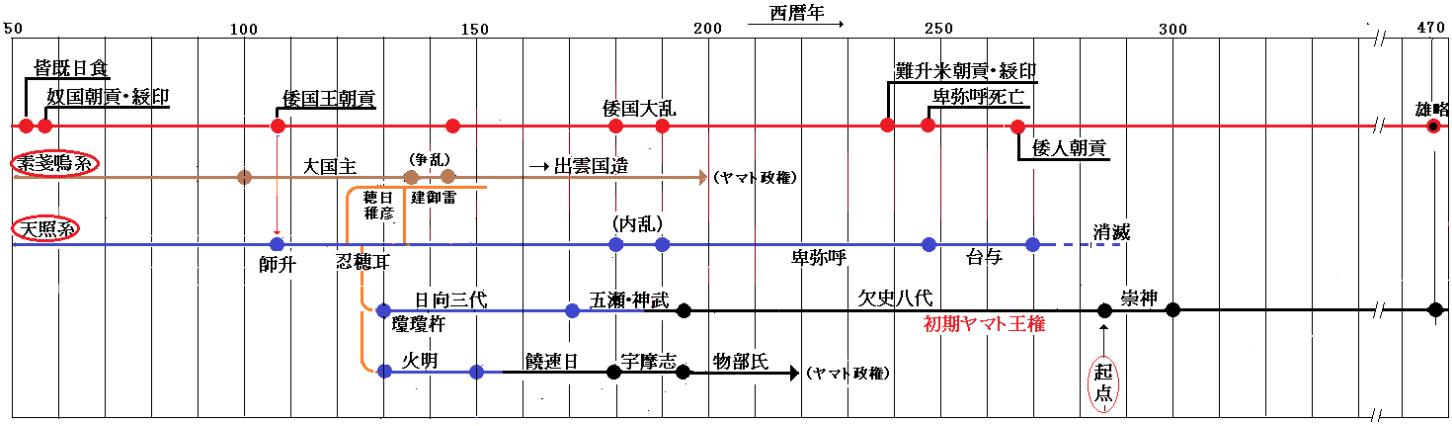
ヤマト王権の成立過程に関しては様々な議論がありまだ収束は見られない。従って屋上、屋を重ねることになるが、一つの推論として、**図 1** のようなチャート(年表)を提案してみたい。

ここで、図 1 の**上部のライン**は中国史書（後漢書/魏志倭人伝など）に準じて、既知のイベントをプロットし年代に指標を与えるものである。

上部ライン下の**中間ライン**は「素戔嗚に始まり大国主から出雲国造に繋がる山陰系の流れ」を表し、国譲り神話で中間ラインに繋がっている。素戔嗚系の流れと仮称する。

下部のラインは北部九州から畿内にかけて展開される流れで、中途で、「天照から邪馬台国に至ってやがて消滅する本流」、「瓊瓊杵に始まって皇統譜を形成する分流」、「火明に始まって物部氏を形成する分流」の３つに分かれる。２つの分流は崇神天皇の活躍起点を西暦 285 年頃に想定し、安本氏が提唱する平均在位 10～15 年を目安にして記紀に記された皇統譜/神統譜を両向きにたどり、連関を繋いで作成している。なお青色ラインは九州で、黒色ラインは畿内で流れが進んだことを表わしている。

図 1. ヤマト王権の成立プロセス(推論)



3．提案の骨子

(1) 年表の説明に入る前に、前哨的に、図 1 の上部ライン上に記す事象について説明を加えておく。

まず上部ラインでは西暦 53 年頃に起きたとされる皆既日食を記しているが、これは天照の岩屋戸隠れの伝説を意識したものである。昔から天の岩戸伝説は皆既日食という百年に一度の天体現象に由来するという説が流布されてきた。神話的表象として十分ありうるので、この説を採って天照を北部九州に実在した女酋ないし巫女王と見なした。さらに後漢書によれば、その直後の 57 年に奴国の首長に金印が授与されている。玄海灘に面した沿岸部には、弥生中期頃、須玖岡本/三雲南小路遺跡などの遺跡に見られるような強い王権が現れ、その延長上で沿岸部の奴国/伊都国などが北部九州のクニ社会をリードしていたと考えられる。

さらに後漢書には 107 年の倭国王(師升)の朝貢が記されている。この朝貢は奴国王綬印から丁度 50 年を経ている。この場合、倭国の定義が重要になる。後漢書によれば、奴国は倭国の極南界にあるとされる。倭国を日本全体で捉えれば、明らかにこれは誤記であるが、クニ連合としての倭国を、朝鮮半島南部から玄界灘をはさんで北部九州湾岸部までに限るならば、奴国を極南界とみるのは決して不自然ではないと云われる。50 年経過して、クニ連合としての倭国は沿岸部から内陸方向に大きく拡大していたと思われるが、中国側の倭国イメージに大きな変化はなく、"倭国王"は朝貢船をだせる玄界灘沿岸部の有力なクニの首長であった可能性が高いと思う。綬印はなかったようなので、50 年前と同様、奴国王が"倭国王"だったと思うが、場合によっては伊都国王だったのかもしれない。

さらに中国の史書には倭国大乱が記されている。期間は史書によって別れるが、倭国の実質規模を北部九州圏に限れば、6～8 年間続いて 189 年頃には鎮静したと思われる。中国史書の記述では、沿岸部の倭国王のもとで数十年、平穏が保たれていたようだが、その間も倭国は北部九州全域さらには山陰地方に拡大し、倭国王の立ち位置もおのずと変化していったと思われる。大乱は王朝交代を意味すると云われるから、おそらく奴国や伊都国に比定される旧勢力が、実力を蓄えた新興勢力にとって替わられたことを暗示する。新たな倭国連合の盟主は、沿岸部に接続する内陸部(筑後川流域方面)から発生した勢力(邪馬台国)ではなかったかと思う。

さらに中国の史書は、239 年に朝貢した卑弥呼の使者に親魏倭王の印を与えたこと、帯方郡が邪馬台国を支援したこと、おそらく 248 年に卑弥呼が死没したこと、やがて台与が擁立されたことなどを記している。卑弥呼は、沿岸部の王権を駆逐した内陸部勢力(邪馬台国など)に奉斎された存在で、特に伝説の女酋(女王)である天照に結びつくとは限らない。注目すべきは、狗奴国との対立に際し邪馬台国が帯方郡によって支援されていたことである。なお晋書によれば、266 年倭人が朝貢したことが記されており、卑弥呼の後継者である台与の朝貢と云われている。以降、邪馬台国の消息は途絶える。何らかの出来事(後述)によって分家筋の初期ヤマト王権の差配の中に組み込まれたと思われる。

(2) メインとなる**下部ライン(天照系の流れ)**について説明する。数々の疑問を内包する内容になるが、敢えて議論を試みてみたい。

前述のように下部ラインは中途で 3 つに分れる。まず「天照から邪馬台国に至ってやがて消滅する本流」から説明する。図 1 の本流は北部九州の[沿岸部＋内陸部]における総括的な経過を表示している。この流れの中で、倭国王の地位を引き継いだ忍穂耳の時代に、素戔嗚系との抗争、即ち山陰の大国主への介入(国譲り)が起き、その後で ”やがて瀬戸内から近畿に進む２つの分流” が発生したと思われる。国譲りによって出雲王朝は解体し葦原中国の結束は失われたが、天照系の内部にも、180 年頃、前述のように倭国大乱が起きたと考えられる。その結果、沿岸勢力が奉斎する倭国王は倒され、その混乱の中で共立された卑弥呼が北部九州を邪馬台国連合の形で長期にわたり差配した後、台与に引継がれた。その間、帯方郡の支援の下で邪馬台国は安泰を保っていたが、帯方郡の支援が弱まった時点で、長年対立してきた狗奴国に蹂躙されて邪馬台国連合は解体し構成国(クニ)の多くは初期ヤマト王権の下に避難したと考えられる。更に狗奴国もなし崩しの形で強大な初期ヤマト王権に組み込まれていったようである。邪馬台国と狗奴国の消滅については資料(＊)を参照されたし。

次に、「瓊瓊杵に始まり皇統譜を形成する分流」について説明する。記紀では、忍穂耳は瓊瓊杵を地上に派遣するが、派遣先は本地である内陸部ではなく辺境の日向であった。端的に言って、これは“分家“を意味する。この場合、派遣先の日向については意見が分かれるが、日向灘に面した倭国のコロニー(恐らく投馬国の前身)と考えたい。阿蘇-九重や豊後水道を通って南下した移住民は、熊襲や隼人あるいは土蜘蛛(縄文人)達に囲まれて暮らしていたはずだから、瓊瓊杵に始まる日向三代の神話は決して寓話ではない。神武東征の直接動機は不安と自然災害からの脱出であったように思う。数十年前に瓊瓊杵と相前後して分家した饒速日の成功(後述)がこれを強くプッシュした筈である。最強の熊襲・佐伯を取り込んだ東征軍は、多分 20 年ほど前の饒速日の東遷ルートをたどって安芸・備前の在地勢力を取り込み、記紀の記述に近い形で大阪湾岸域や紀州灘沿岸域および大和盆地を征圧した。当時の奈良盆地の湿地周りには、先着の饒速日が連れてきた物部(族)が定着し、その刺激を受けて拠点集落は次第に唐古・鍵から纏向などの磯城地方に拡がりつつあった。後続の征服者はこれに便乗して、出雲系/縄文系の在来氏族や同族の物部氏と関係を深め、支配体制を固めていった。この過程がいわゆる“欠史八代“であり、その成果は崇神紀の四道将軍の派遣とこれに続く景行・垂仁…応神紀の軍事的/政治的な膨張となって現れ、次々と新たな神話を生み出していったと考えられる。なお年代的には、

神武東征と倭国大乱は接近するが、ルート的には、東征軍は日向から宇佐、岡水門、そして安芸にでて、北部九州のメイン部分を避けているので、干渉問題は起きなかったようだ。また東征の途中で安芸・吉備の瀬戸内海勢力を取り込んだ効果は大きく、これは前方後円墳の祭祀システムの形成につながる。

さらに、「火明から始まって物部氏を形成する分流」について説明する。記紀の記述にはないが、瓊瓊杵と前後して兄の火明命も分家したものと思われる。なお先代旧事本紀には火明と饒速日が同一人物としてされているが、おそらく火明が父で、饒速日がその子になるだろう。瓊瓊杵が日向のコロニーを譲渡されたように火明は遠賀川河口域のコロニーを譲渡されたと思う。このコロニーは海峡を渡って、周防/安芸/伊予辺りまでその勢力を広めていたようで、淡路島/大阪湾沿岸/奈良盆地の詳しい情報を持っていたと思う。このコロニーの民(物部)は総じて軍事に優れ鋳鍛造や操船などの技術に長けていた。東遷の動機には渡来人的な開拓意識があったのかも知れない。饒速日はこの異能の民に奉斎されて東に向かい、大阪湾岸から奈良盆地(特に磯城)にかけて展開し、穏便な形でその知識と技術を敷衍したようだ。そのため畿内は目に見えて活性化した。近年の発掘でわかった纒向の急激的な膨張は、饒速日(物部)の東遷を一つの糸口にしていると思われる。

饒速日の死没は幸いにも神武の到来に同期していた。後継の宇麻志麻遅は、巧みに神武の統治に取り入って物部氏の立ち位置を確定した。神武に続く欠史八代末期には、大王家の外戚としてその地位を固めた。崇神の母が物部の娘であったことは注目すべき。神武東征は文字通り軍事行動という印象が強いが、饒速日-物部の東遷にはその印象が薄く民生的である。

遅ればせながら、メインとなる下部ラインの年代の設定を説明する。まず天照系の本流については、倭人伝など中国の史書をベースにおいて設定した。次いで、考古資料と伝承資料のマッチング例から崇神の活躍起点を 285 年頃と仮定した上で、安本氏が提唱される平均在位説(10～15 年/1 代)を準用して、

日向三代＋五瀬-神武➞65 年(13 年ｘ5 代)、欠史八代➞90 年(＝11.25 年ｘ8 代)、

崇神 15 年、崇神～雄略➞170 年(＝15.45 年 x 神功皇后も含めて 11 代)

とおくことで「瓊瓊杵に始まって皇統譜を形成する分流」の年代を設定した。更に、[瓊瓊杵と火明]および[神武と宇摩志麻遅]を同時期におくことで「火明から始まって物部氏を形成する分流」の年代を設定した。

(ただ、火中出産など日向神話とのマッチングや欠史八代の不透明さなどを考えれば、少なくとも、もう 20 年ほど引き下げて、忍穂耳を倭国王の師升に引き当てるのが妥当なのかも知れない、今後考えてみたい。)

(3) 最後に**中間ライン**即ち「素戔嗚に始まり大国主から出雲国造に繋がる山陰系の流れ」について説明する。出雲神話はイザナギ-イザナミ神話の延長で寓話めいているが、近年の考古学の成果から、強いリアリティが感じられる。この流れの足掛かりは、伝承資料において[素戔嗚と天照]及び[穂日と忍穂耳]が兄弟関係にあることである。伝承資料からは、素戔嗚は天照と争って根の国・出雲に追われた後、そこで一定の基盤を作り、やがて大国主がこれを引き継いで広域化させ、いわゆる葦原中国(山陰 - 山陽 - 北陸 - 近畿)の盟主になったことが想定される。すなわち、出雲-伯耆-因幡は日本海を介して北部九州および弁韓・辰韓に繋がる利便に恵まれ、荒神谷・加茂岩倉遺跡などからうかがえるように、弥生中期から弥生後期にかけてクニ社会に進み、やがて大国主のような強力な首長が現れて、山陰と云う枠を超えた葦原中国という緩いクニ連合を形成したと考えられる。恐らくこのクニ連合の脆弱につけこんで、天照系の北部九州連合が軍事介入を試み、例えば、倭国王であった忍穂耳の兄弟の穂日そして一族の稚彦が派遣されたようだ。結果的に建御雷や経津主などによって出雲王朝が征圧されたのは国譲り神話の通り。その後の出雲は、穂日系の首長にひき継がれ、邪馬台国に対して半独立の状態のままに３世紀の国造家支配に移行した後で、垂仁～景行の頃になし崩しの形で初期

ヤマト王権の下に組み込まれたと思われる。出雲はもともと穂日系の相続予定地だったように見える。
（葦原中国の実態は不明であるが、高地性集落などの考古資料からある程度憶測できるのかも知れない。）

4. 提案における論点

(1) 安本氏の邪馬台国九州説では、卑弥呼と天照大神が同一視され邪馬台国の東遷が主張されている。この説は記紀の記述からあまり逸脱しないため、個人的にも長年、共鳴し傾倒してきたが、

・神武東征が、何故、宮崎日向から始まるのか、説明できないこと、

・東征の年代が AD300 年前後にずれ込み、欠史八代が大幅にカットされること

など、原初的な疑問をぬぐい切れず、この提案に至った。以下、その論点を記す。

(2) 本提案の基本的な論点は、倭人伝に記される倭国をどう解釈するかである。冒頭に述べたように倭の 30 ヶ国は九州島の中でほぼ収まると思う(ただ倭人伝に記される各クニの戸数には疑問が残る)。おそらく邪馬台国は、西日本全域におよぶ広域のクニ連合ではなく、北部九州(肥前–筑前-筑後–豊前)とその周辺の限定的なクニ連合の盟主として、正規の手続きを踏んで魏に朝貢した結果、倭人伝の対象になったに過ぎないと考えられる。多分、帯方郡は邪馬台国の東隣にもっと強大な王権が成長していることを知らなかったようだ。近年の纒向や吉備をめぐる議論では、考古資料をベースにして、倭国を西日本全域に拡げ、倭国大乱を広域化した争乱と見なす傾向(規模の拡大解釈)が見られるが、大陸側の認識はほぼ九州島内で完結していたと思う。因みに「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり」という倭人伝の記述はもっと注目されるべき。
（卑弥呼当時の邪馬台国には山陰(少なくとも出雲–伯耆)が含まれるが、前述のように穂日系の首長によって山陰は半独立状態にあったので、実質上、邪馬台国は九州島のみに限られる盟主国であったと考えられる。）

(3) 天照系の流れにおいて、分家によって２つの分流が起きたことは重要である。結果論として、本家はつぶれ分家の流れが皇統譜となって現在に至った。この背景を考えてみる。

周知の通り水田稲作民の集落は、在来民を取り込んで北部九州から本州全域に拡がっていった。その形態には幾つかのパターンが考えられるが、ティピカルには、「人口増加で食料が不足し、余剰になった集落住民が水田稲作の適地を求めて移住を繰り返すパターン」が考えられる。北部九州のような稲作先進地ではこれが意図的に行われたようだ。一種のコロニーである。奴国のような沿岸国では、これに交易の拡大という動機が加わって、複数のコロニーをもっていた可能性がある。天孫降臨は神道で云う“天降る“ではなく、倭国王・忍穂耳からその末子・瓊瓊杵尊へのコロニーの譲与を暗示している。譲与はその兄の火明にも行われ、瓊瓊杵は日向灘沿岸部の、火明は遠賀川河口域のコロニーを相続した。時期的に、出雲への介入と重なるようなので何らかのドラマが予想される。

火明が相続した遠賀川河口コロニーが成熟した集落群で構成されていたのに比べ、日向灘コロニーはまだ十分に成熟しておらず、新規移住者にとって決して安穏な状態ではなかったようである。これが安定化への志向と軍事への傾斜を強めた。おそらく日向三代に続く東征の主役は、倭国出身者に率いられた強力な熊襲・佐伯の傭兵部隊だったように思う。そして九州島で起きた局部的な流動化は、東遷/東征を通じて、西日本全域に波及していった。

旧来から北部九州と近畿圏の地名の類似性が指摘されているが、それは西から東に向かう人文の流れ、即ち東遷/東征に伴う兵士とその家族の移動、これに続く稲作民や工人達の移動、その後の邪馬台国の弱体化に伴う避難民の移住によって派生したと思われる。

(4)　もちろん瓊瓊杵と火明の分家の後も北部九州にあった天照系の本流はそのまま持続した。この本流の主役は玄界灘沿岸国(伊都国や奴国など)に由来する 107 年の師升以来の倭国王であったと思う。しかし時間の経過とともに、後進地であった筑後川流域の内陸国が生産力/経済力をつけ、180 年頃には沿岸国と争いになったようだ。争乱は長期におよび、結果的に倭国王は失脚した。経過はともかく、大陸側からみれば国王の失脚自体は"大乱"に他ならない。その後、卑弥呼が共立され、長年の統治の後で台与に引き継がれたのは周知のとおり。邪馬台国近畿説では無視されているが、卑弥呼晩年の邪馬台国が狗奴国と対立状態にあり、帯方郡が邪馬台国支援していたことは邪馬台国問題を考える上で重要である。この対立状態は台与の代に持ち越され、結局、前項 3(２)で述べたように、邪馬台国連合は解体し、勝者である狗奴国ともども初期ヤマト王権に組みこまれたようである。このなし崩しの結果には次のような背景があると思う。詳しくは資料(＊)を参照されたし。

①狗奴国は、玄海灘沿岸国との直接交易を望み、障害になる邪馬台国本体だけを排除しょうとしたこと、
②狗奴国には、もともと大和の初期ヤマト王権に対して熊襲由来の同族的な親近感があったこと、
③そもそも初期ヤマト王権と邪馬台国は同根であり、分離した後も共存する存在であったこと、
④邪馬台国連合の内部には倭国大乱(沿岸国 vs 内陸国)以来の確執が存在していたこと。

因みに③の影響は大きく、これによって邪馬台国は、専ら瓊瓊杵系の流れに依る記紀から割愛されたと思う。

(5)　図 1 は、崇神の活躍起点を 285 年頃に仮定したうえで、伝承資料をフレームワーク的に運用して策定している。考古資料とのマッチングは余り意識していないが、個人的には、考古資料からの大きな逸脱は起きていないと思う。例えば、纒向遺跡や纒向古墳群は、橿原を中心としたいわゆる"葛城王朝"に隣接して存在するが、伝承資料(記紀)では、この王朝は婚姻関係で纒向を含む磯城地方と繋がっているので、考古資料に現れる纒向の繁栄に十分符合すると思われる。また葛城王朝は欠史八代そのものであるから、年代的に九州に併存していた邪馬台国とほぼ重なり、纒向≠邪馬台国という主張に符合すると思う。これらの議論については資料(＊)を参照されたし。

(6)　2 世紀末から 3 世紀初めにかけての纒向の急成長を、庄内土器などの考古資料を用い近畿や瀬戸内東部で起きた地生えに近い弥生社会の進化によって説明する考えは十分に成立すると思う。しかし、歴史上の多くの事例では、外部の刺激によって時代の転換が起きている。流動化した九州島から押し寄せる波に刺激を受けて古墳時代の幕が上がったと考える方が、思考的には無理がないように思う。

資料(＊)：　**試論[初期ヤマト王権の成立プロセスに関して]**　Ver.up のための検討その 1
https://catfood-tecsheet.ssl-lolipop.jp/mer.02.pdf

＜あとがき＞

このメモランダムは素人が描いた古代像です。個人的に歴史が好きで、余暇ができると、好んで歴史関係の市販書を読んでいました。特に日本の古代史については、若い頃一時的にとりつかれたことがありますが、今となっては、曖昧な記憶しかありません。この歳になって、知人から唐突に九州王朝のことを聞かれたのをきっかけにして、インターネットや図書館を頼って、古代史の勉強を再開しましたが、齢７７の老耄には蹉跌が大きく、単なる知見漁りで終わりそうな気がしてきました。そこで、まずテーマに対して仮説を設け、それを資料類で確かめる形で勉強を進め、その都度、仮説の修正を繰返しファイナルに到達することにしました。従って、このメモランダムはごく初期の仮説にほかならず、それがどこに落着するのかは不明です。専ら、年周期で Ver-up を行ない、考古学の結果との照合等を中心に、勉強の成果を反映させていこうと思っています。(今回の Ver－up は資料(＊)の作成に伴うもの。次は纒向遺跡/古墳群の情報を調べ考察して Ver-up する予定)